

柔らかな間合い

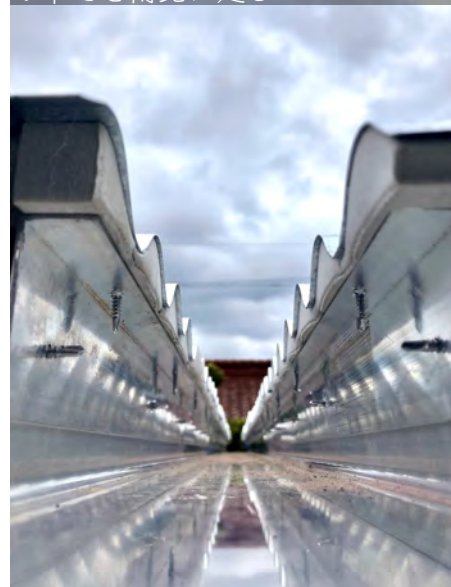


暮らしの変化や敷地の制約を受けとめながら、“やわらかな間合い”に導かれて、この家のかたちづくりされている。築100年を超える木造平屋の北側に幅5.5mの空地があり、将来的にその敷地を段階的に更新する計画の第一段として、小さな住宅を建てた。既存住宅は今も親族の集まる場として残っており、すぐに解体することは心理的にも現実的にも難しい。私が将来相続する予定だが、親戚にとっては「実家」でもあり、配慮を要する。新築住宅は、敷地内に仮設的に小さく建てておくことで、急な変化を避け、無理のない形で住まいを更新していく提案である。現在は高齢の母が週の半分以上をこの家で暮らし、将来的には移動が困難になった際の終の住まいとする計画だ。



夜景の外観。トッブライトから漏れた光が上部の屋根にやわらかく反射し、前方の空間をやさしく照らしている。光が直接的でなく拡散されることで、周囲の静けさに溶け込むような穏やかな佇まいが生まれている。

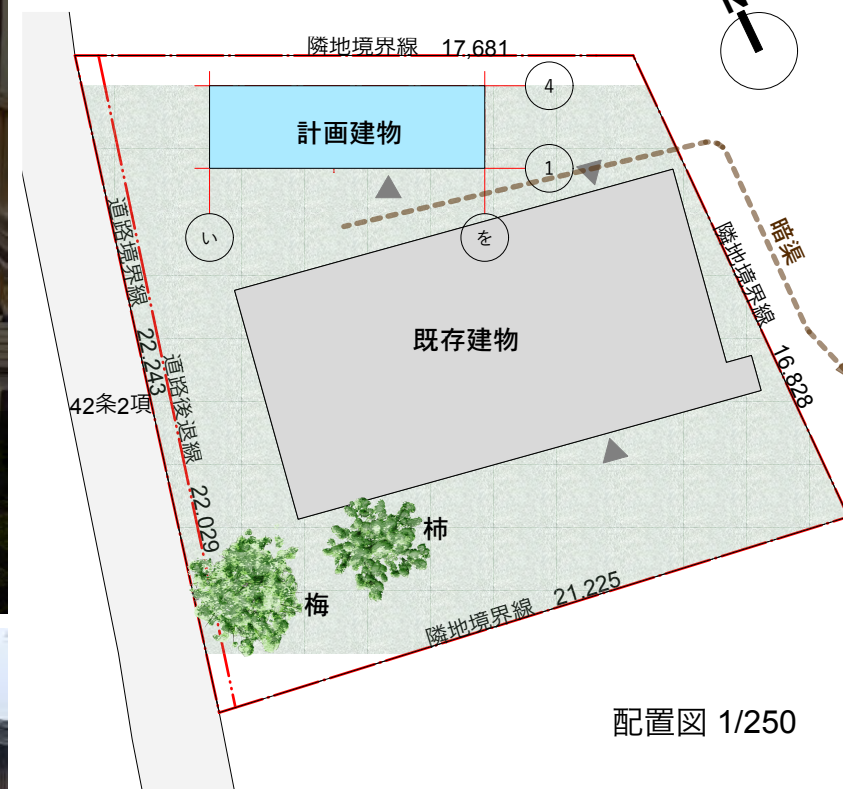
雨樋はアルミ溝型鋼とLアングルを組合せたシンプルな構造、建物の中心を南北に走る



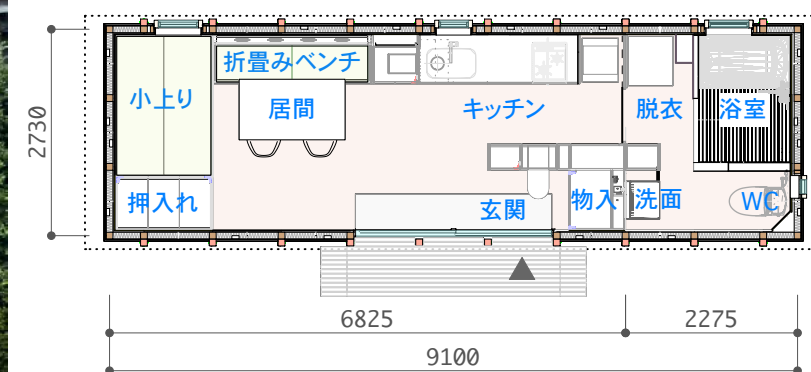
南側の道路から計画建物を望む。築100年の既存住宅の背後に、そっと寄り添うように建ち、道行く人の視線からは半ば隠れている。幅員の狭い前面道路は車の通行もほとんどなく、静かで穏やかな環境の中に、小さな新しい住まいが控えめに佇んでいる。



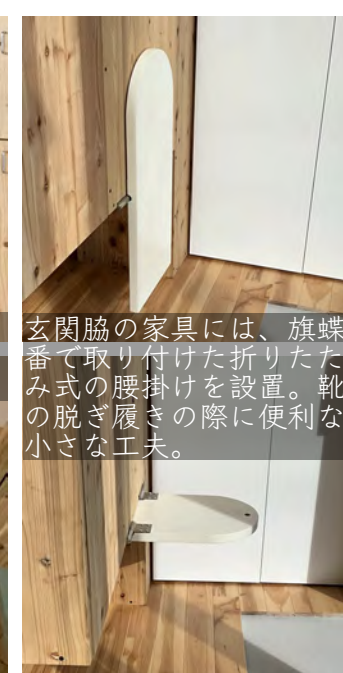
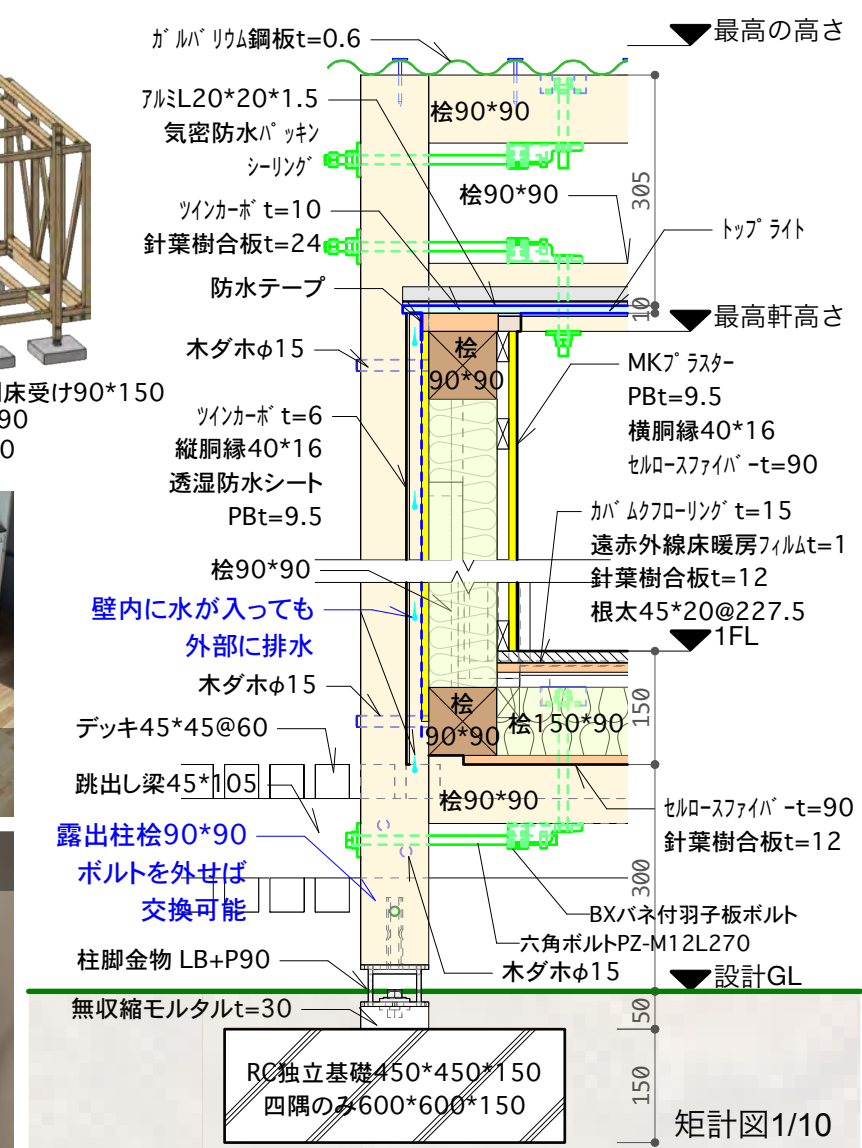
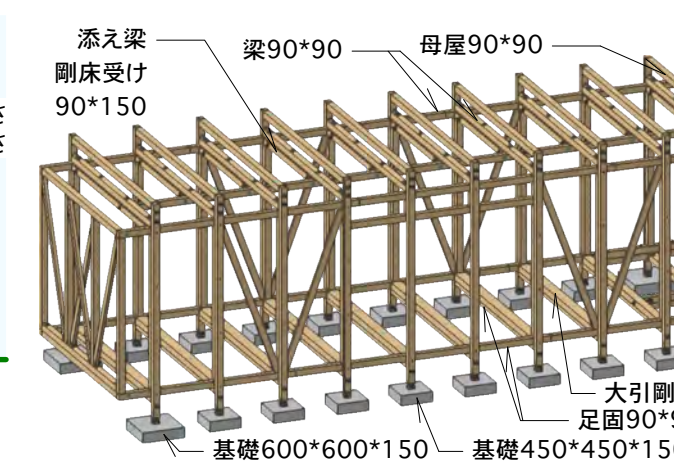
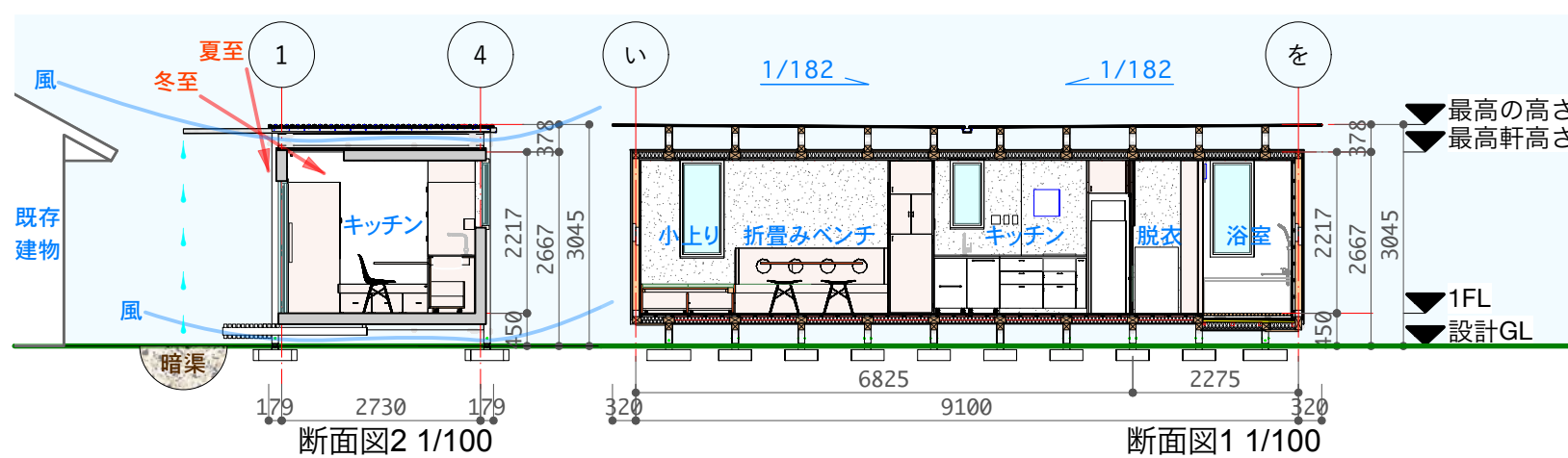
付近見取図 1/1500



配置図 1/250



平面図 1/100



建物は延べ床面積7.5坪。構造は木造で、90×90と90×150の角材のみで構成した軽量な架構とし、簡易な独立基礎でも耐震等級3を確保している。床下は地面から30cmを開放しており、通気性が高く、設備更新やシロアリ対策にも有効である。

屋根は上下に30cm離れた二層構造で、上部の屋根は外気に開放されており、建物全体が日傘をさしたような状態になる。日射熱を直接伝えない仕組みにより、夏の熱ごもりを防ぎつつ、冬は低い太陽高度によりトップライトから日射を室内に取り込む。暖房は家全体に敷設した遠赤外線床暖房のみ。熱源機器による温度ムラやヒートショックを抑え、温度差の少ない快適な環境をつくっている。空間の仕切りは最小限で、洗面・トイレ・浴室をまとめたスペースとその他を隔てる引戸が1枚あるのみで、その他の仕切りはシャワーカーテン等に対応している。引戸を開け放てば空間は一体化し、動線は極めてシンプルになる。

内部には、腰掛けののちょうどいい高さ40cmの畳小上りを設け、布団を敷いて寝室として使える。日中は布団を畳めばL型の畳ベンチとなり、可動式のテーブルと組み合わせることで、居場所や作業スペースを自在に変えることができる。浴室も床をスノコで嵩上げし、段差のない動線とした。

この住宅は、二拠点生活の一方の拠点であり、母の現在の居住と家族の将来的な移行を支えるための中間的な場でもある。移動式クレーンや足場を必要としないコンパクトな構法とすることで、建設・解体の負担を抑え、敷地の次なる世代への引き継ぎを容易にしている。

ローコストでありながら、断熱性・耐震性・可変性に優れた柔軟な空間とし、暮らしの変化に対して無理なく対応できる「等身大の豊かな住まい」のあり方を模索した試みである。

